

東洋大学学術情報リポジトリ Toyo University Repository for Academic Resources

井上円了の法経思想

著者	柴田 隆行
雑誌名	井上円了センター年報
巻	26
ページ	3-21
発行年	2017
URL	http://id.nii.ac.jp/1060/00009544/



井上円了の法経思想

柴田隆行

shibata takayuki

一 実学と哲学

哲学館（東洋大学）は、一八八七（明治二〇）年に井上円了によって創設された、哲学教育を専門とする異色の大学であった。というのも、明治期以降の日本で新たに設立された私立大学の多くは、東京法学会（一八八一年、法政大学）、明治法律学校（一八八一年、明治大学）、英吉利法律学校（一八八五年、中央大学）、関西法律学校（一八八六年、関西大学）、日本法律学校（一八九八年、日本大学）、京都法政学校（一九〇〇年、立命館大学）、さらに、夜間の経済学科と法律学科を擁する専修学校（一八八〇年、専修大学）、政治経済学科・法律学科・理学科・英学科を擁する東京専門学校（一八八二年、早稲田大学）などのように、法学ないしは政治経済学を専門とする大学がほとんどであったからである。もちろん、蘭学塾（一八五八年、慶應義塾大学）や学習院（一八七七年、学習院大学）、皇典講究所（一八八二年、國學院大学）など独自の伝統を持つ大学のほか、キリスト教に基づく立教学校（一八七四年、立教大学）や同志社英学校（一八七五年、同志社大学）、仏教に基づく宗教院（一八七二年、立正大学）や曹洞宗専門学本校（一八八二年、駒澤大学）等も数多く設立されている。東京物理学講習所（一八八一年、東京理科大学）も創立は古い。一方、官学では、東京医学校と東京開成学校が合併して東京大

学（一八七七年）となり、工部大学校は一八八六年の帝国大学令により、東京大学を改めた帝国大学に吸収合併された。

大学の起原はヨーロッパに求められるが、そこでは本来、神学部・法学部・医学部が基幹学部であり、その他は古代ギリシア・ローマ以来のいわゆる「自由七科（文法学・修辞学・論理学・算術・幾何学・天文学・音楽）」に括られ、それぞれの学問が学部ないし学科として独立するのは一八世紀末以降のことである。

こうした状況下での哲学館創設であるが、『ショートヒストリー東洋大学』（改訂第六版、二〇一三年）に次のような記述がある。

哲学館の創立には、このような私学誕生の流れが関係していたが、国立も含めたこれらの機関が担っていた領域は、医学・法学・経済学・工学・農学・自然科学・語学などの、どちらかといえば実学の分野が主流であり、当時の高等教育の世界では、井上円了のように、哲学を重視することは少数派であった。（三一頁、傍点筆者）

日本の大学における実学志向はむかしからよく指摘されることであり、資格重視の現在その志向はいっそう強調され、Universityと名乗りながら専門学校同然の大学も見受けられる。しかし、実学とはどういう意味か。時代を遡って見てみると、一八七一年から七三年頃に執筆されたという西周の『生性発蘊』に以下の文言が見られる（傍点筆者）。

夫レ現今ニ在テハ、実学ハ、必ス、事實ノ視察上ヨリ、立ツヘキコト、人々皆一致スル所ナリ、然モ、其視察、唯一端ニ在テ、是ヲ以テ、學術ノ根元トナスコトハ、曾テ有サル所ナリ、蓋シ確定シタル理ノ講究ハ、總テ視察ニ本ツクヲ、必トスト雖モ、其視察ヲナス前ニ、既ニ多少、理ノ講究ヲ要ス、是レ相待ツモノナリ、故ニ、若シ見象ヲ觀スルニ当リ、是ニ依テ、多少ノ道理ヲ、理會シ得ルニ非レハ、各自ノ視察ヲ合シテ、是ヨリ工夫ヲ施スコト、能ハサル耳ニ非ス、又之ヲ記得スルコトモ、能ハサルヘシ、

西周の言う「実学」は、事実に基づく学問を言い、実際に役立つ学問という意味ではない。実学と実用を混同してはならない。源了圓は『実学思想の系譜』（講談社学術文庫、一九八六年）で次のように指摘する。

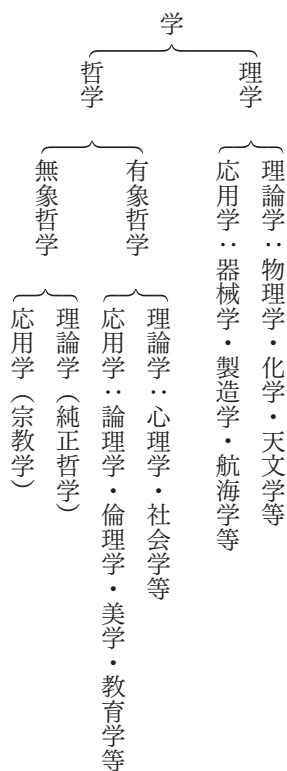
今日、日本では「実学」というとき、実証性と合理性に裏づけられ、實際生活に役立つ有用な学問、というような意味に定着しています。しかしその歴史的用例を見ると、人間的眞実追求の学問、道德的実践の学問、政治的実践を旨とする学問、經世済民の学問、民生の役にたつ利用厚生の学問、等々、多種多様な意味が含まれています。しかしそれは何の脈絡もない雑多な概念の集合というのではなく、虚学・偽学に対する、「内容がある眞実の学」(real and true learning)であり、またそれ故にそれは有用性をもつという基本的性格がそこにあります。(二二二頁、傍点筆者)

「雑多な概念の集合」ではなく「内容がある眞実の学」と言えば済むところで「虚学・偽学」という言葉を使ったり循環論に陥る。直接的実用を求めない「人間的眞実追求の学問」は種々あるし、文学者のなかには、「偽学」と

までは言わないまでも「虚学」で何が悪い、と開き直る人も少なくない。哲学館は、実学志向の時代にあえて對抗して創られたと言われるが、創設者の井上円了は『奮闘哲学』（一九一七年）で、「すべからく実学を修めて民福を補うべし、百説はしかず一行の多きに」（選集第二卷、二三〇頁）と漢詩で活学活書を唱えている。円了は『哲学茶話』（一九一六年）でも「哲学の応用」を説き、たとえば地震や津波の際に金満家は金で罹災者を支援し医者は負傷者を治療し宗教家は死者を供養し、労力者は大工、米屋等応分のことをなすが、哲学者は何をなしているかと自問して、天変地異は逃れえず地妖は予知できず吉凶禍福は循環するものであるから、被災に関しては「将来の幸福を準備するよう、慰諭し奨励すべき」（選集第二卷、一一九～一二〇頁）だと説得するというが、被災の現場を思うと、どう鼻屑目に見てもこの言説はブラックユーモアであらう。

「実学」という言葉は、元来、明治期も現代も、実証科学的という意味で使われ、たんなる実用を意味しない。井上円了にとって「実学」すなわち「活学活書」は、哲学の教育機関開設（哲学館開設）、世間教の展開（修身教会設立）、全国巡講（講演と資料調査）、哲学堂開設、等々として実現されたと見るべきであろう。すなわち、井上円了にとっては哲学こそが実学であった。

ところで、哲学館を前身として発展した東洋大学は、現在、一三学部四六学科を擁する総合大学となり、文学、経済学、経営学、法学、社会学、理工学、生命科学等、医学系を除くほとんどの学問領域をカバーしている。井上円了が著した『妖怪学講義』（一八九六年）では、次のような学問体系が構想されている（選集第一六卷六三～六四頁）。



妖怪学講義では、総論以下、理学部門、医学部門、純正哲学部門、心理学部門、宗教学部門、教育学部門、雑部門に亘って妖怪が研究されており、ここでは工学系は含まれないが医学は含まれる。井上円了が、「お化け博士」という俗称に甘んぜず、妖怪学を歴とした学問体系として構築し、しかるべき資金と組織力を得ていたならば、明治大正期において早くも帝国大学を凌ぐ日本で最初の総合大学を実現しえたにちがいない。

——と、言いたいところではあるが、総合大学とするにはみごとに欠けている分野がある。ほかならぬ法学、経済学、経営学である。冒頭で確認したように、明治期以降に開設された日本の大学の多くが法学と経済学（理財学）を専門領域としていたことからすれば、井上円了の学問体系は、当時主流であった「実学」をあえて避けたものと思われる。ちなみに、東洋大学における経済学部設置は一九五〇年、法学部設置は一九五六年、経営学部設置は一九六六年と、いずれも戦後である。

井上円了の膨大な著作群に法学や経済学に焦点を絞って論述されたものはないに等しい。井上円了は、実学の

時代と言われ、多くの実学系大学が創設された明治大正期において、法や経済について何も考えていなかったのだろうか。それとも、考察は深めながらも、それをあえて著作や講義等で表明しなかったのだろうか。明治一〇年代の自由民権運動の高揚、それを抑える一八八七年一月二六日の保安条例制定、一八八九年二月一日大日本帝国憲法発布、同年日本最初と言われる経済恐慌、ヨーロッパではパリ万博開催や第二インターナショナル結成等々、国内外ともに法学や経済学に関わる重要事項が続く時代である。

二『星界想遊記』

井上円了の膨大な著作群に法学や経済学に焦点を絞って論じられたものはないに等しい、と述べた。が、皆無ではない。井上円了の法経思想を知る手がかりとして、一八九〇年に哲学書院から公刊された『星界想遊記』がある。論考と言うべきか随筆と言うべきか、「精神恍惚として夢中に彷徨」した時の思い出、という設定である。

最初に訪れたのは共和界である。この世界は、男に一定の妻なく女に一定の夫のない純然たる男女共和独立の国である。男女同等同権であるがゆえに、男女の間に結婚の礼なく、夫婦の別なく、ただ一時の結婚、一夜の夫婦あるのみ。男女おのおの別居し、男子も女子も一人にして一家に住す。ただし、資産なき者は男女合宿所で生活することになるが、そこも一室一人限りとする。女性が妊娠した場合、政府が設立した産院で出産し、子どもは政府が設立した育児院に入れて養育する。したがって、出産とともに親子の縁は断たれ、子は生まれながら孤独の身となる。子は成長すると男女別なく育児院を去り、小学、中学に入り、成人となつて社会に出て職業に就く。一町一村ごとに産院、育児院、小学、中学が設置され、その経費はみな国民の租税より支出する。政府は国民中その年齢二十歳より五十歳まで男女を論ぜず人頭に応じて税を賦課する（選集第二四卷二六―二七頁）。

ちなみに、ここで描かれている世界は、ロシア革命後に国家保護人民委員となったアレクサンドラ・ミハイロヴァ・コロンタイによって指導された、女性を育児と家事から解放することを目的とする、育児院と学校による集団育児体制を想起させる。ただし、コロンタイの政策は井上円了の想遊より三〇年後のことである。

円了の報告は続く。男女区別なく夫婦もないので父母もなく、兄弟なく子孫もない。人生一人一代限りとしたら、各人がその職を守り産を作るのは誰のため何のためか。それは社会公衆のためである。社会が父母であり夫婦であり兄弟であり子孫である。社会公衆を代表するのは政府であるから、国民が死んだ場合の葬祭は政府が行う。財産はすべて政府の所有に帰す。共和政体の下に財産共有と男女別居の制度が組織されるに至る。政府が社会を代表し国民を代表するがゆえに、国民は政府のもとで自らの義務を果たさなければならない。そのため法律は厳にしかつ煩なものでなければならない（同右三一頁）。

円了が次に訪ねたのは商法界である。商業貿易中心のこの世界では政府も政体も統御の法もない。政府なく法律なく租税なく、町村費等一切ない。君臣上下の別なく、国会議員の設けなく、裁判賞罰の法もない。人民みな純然たる共和独立にして、自裁自治の風習あり。一家の法律は一家これを作り、一人の法律は一人これを作る。とは言え、私有の土地あり、私有の家屋もある。世の進歩に従い、人みな永遠間接の利害損益を識量し、一時の小利小欲に着目することはない。盜賊、凶徒の類はほとんど皆無である。というのも、ここは商法国であり、人々の間に信用を重んずる風習があり、ひとたび信用を失えば、再び世間に立つことは難しいからである（同右三三頁）。

こうして無政体に変じてより、いまだかつて一日も戦乱は起きていない。かつて君主政体のときには君主特権を求めて戦乱が絶えなかった。政権を人民に移し、民権を確立し共和政体を組織したことがあったが、富めるも

のますますその勢いを得て自然に貧富の間に上下の階級を生ずるに至った。だが、ほんらい商法が盛んになれば、自ずから諸国共同せざるを得なくなる。内乱紛擾が起くるのは人民の経験不足に由来する。経験を重ねれば争論紛乱の益なきを知り、互いに共和を求むるに至る。一刻千金を争う商業繁昌の社会では争論紛擾などに時日を費やす暇はないからである（同右三六頁）。

とは言え、人と人との間に分界制限の判然せざることありて紛議を生ずるときがある。そのような場合の解決法はただ一つ、運を天に決することである。ここで決まった結果には絶対に従い、それ以上争うことは許されない。こうした運命決着所を決運館という。これを全国に配置し、その運営は商法主義に委ねられる（同右三五―三六頁）。

次の世界は女子界である。この世界では官吏や教員は女子に限られ、男子は生産や工業など筋力を要する事業に就く。男子は一般に無学無知にして、世情に通ぜざるものが多いのに反し、女子は一般に学問や事理に精通し、才あり能あり、男子の上に立ちよくこれを指揮し、一国の政權はすべて女子が担当する。教員、医師、会社の事務員、戸主、戸長にいたるまで、すべて女子に限られる。政府が男子を用いるのは、兵卒、巡査、小使、給仕などだけであり、それらの長官は女子である。女子はその筋骨生来柔弱であるのに対して、男子は堅強なるがゆえに、堅強なるものは力役労働に就き、柔弱なるものは政治教学に従う。これ、まことに天の命ずるところではないか、という（同右四一頁）。

次に訪れたのは尊老国すなわち老人界である。老人を尊敬すること君主のごとく天神のごとし。政体は老人政体と言うべきものである。帝王は全国人民中の長寿第一の者が就く。村長、郡長、県長、つぎに中央政府の官吏あり。村長は一村中の長寿第一の者で、村老と称す。郡長は各村老中の長寿第一の者で、郡老と称し、県長は各

郡老中の長寿第一の者で、県老と称す。県老の上に中央政府の諸老あり。諸老に大老、中老、少老という三つの等級があり、大老は一人、中老は二十五人、少老は百人を限りとする。以上すべて長寿が基準であるから、国民は生まれるとすぐ何日何時何分と分単位で出生時刻を戸籍に登録される（同右四四頁）。

その他、理学界は科学優先の世界であり、学者がすべてを取り仕切る。円了が最後に行き着いたのは哲学界である。ここでは、政府なく、法律なく、騒乱なく、財産なく、妻子なく、病患なく、天災なく、昼夜なく、四時なく、生死なく、衣食を要せず、住居を要せず、教育を要せず、じつに最樂自在の天界の地である（同右六〇頁）。さて、井上円了が星界で想遊した世界は右の通りであるが、円了が哲学界を除き他の諸世界に満足しえず定住しえないと考えた理由は、いずれの世界も圧制を招くと思われたからである。

共和界は、各人同等同権の理想郷のように思えるが、その状態を維持するために人はつねに監視され刑罰の苦に怯えて生きることになりかねず、政府の圧制を免れない、と円了は評する（同右三二頁）。共和政は絶対君主政に対する国民主権を意味することもあるが、立憲君主政や貴族共和政、社会主義人民共和国等々と政体の枠組みが多様化し、いまや一義的な定義ができない。円了が星界で見た共和界では、政府が社会を代表し、国民は政府のもとで自らの義務を果たさねばならず、そこから法律の厳格化が進み、圧制となる。

これに対して、商法界では、自裁自治の風習があるものの、徹底した商業主義、経済合理主義、と同時に運命決定主義の世界である。ここでは、社会の礼節や風習が成り立たず、人情は無視される。結局、商法界にてはいまだ運命の圧制を免れずと言わざるを得ない（同右三七頁）。しかし、商法界では世間の信用が第一と認められ、それがこの世界での風習、人情であって、運を天に任ずという事態はあくまでも例外であつたはずである。その例外的事態への対処法を以て運命決定主義であり運命の圧制を免れないと言うのは、論点転化ないし論点混濁の

誤謬ではないか。

女子界は、完全に女性中心の世界であり、見方によつては「女子の圧制あり」と言わざるを得ない世界である、と円了は評する（同右六〇頁）。しかし、女性が国家・社会の中枢で働いているからと言って、それが圧制だとは言えない。国家・社会の中枢で働く者が男性であれ女性であれ、そのこととその国家・社会が圧制であるか否かとは別問題である。

老人界における政府の権勢は雷電より強く、帝王の威力は天神より重い。その下に無数の人民が圧伏する。このため二億の兵隊と五千万の巡査が常置される。かつては帝王政府の威権がさほど強くなかったために人民騷擾国状不安が続いた。そのため自然に強い政府が求められて現在の状態となった、と円了は言う。今日国家が平穩無事であるのはまったくもって圧束抑制の功力である（同右四六頁）。円了はこのように評するが、先の女子界と同様、帝王が老人であろうと青年であろうと、男性であろうと女性であろうと、圧制になるのは老若男女と無関係である。理学界もまた同様である。

井上円了が推奨する哲学界は圧制にならないのだろうか。円了は次のように述べる。この樂園に入りたいと思うならば、有形界すなわち現世において自らの義務を全うすることが必要である。上に政府あれば政府に対する義務あり、君主あれば君主に対する義務あり、内に父母あれば父母に対する義務あり、妻子あれば妻子に対する義務あり、朋友あれば朋友の義務あり、社会あれば社会の義務あり、国家の義務あり、祖先の義務あり、万物の義務あり、天地の義務あり、自己の身体に対する義務あり。この義務を全うして、はじめて精神世界の永楽を占領しうる、と（同右六一頁）。哲学界に入るためには、先に円了が「圧制」として拒否した各世界においても各人それぞれの義務を全うしなければならないと言うに等しく、哲学界が安住の世界どころか奴隷の世界の果てにな

る危険はないのだろうか。

三 西洋事情

円了が星界想遊記を書く際の着想元はどこにあるのだろうか。莊子などの古典知識が根底にあると指摘されているが、より直接的な影響関係を見るために、たとえば井上円了の蔵書である哲学堂文庫を見ると、そこに福澤諭吉の『世界國盡』（一八六九年）と『西洋事情』（一八六六、六八、七〇年）があり、これからの影響は想定できないだろうか。前者は地理を中心とする世界諸国案内なのでここでは参考にならないと思われるが、後者では欧米の政治・経済が論じられているので、何らかの参考になったかもしれない。とくに共和界への厳しい判断は、フランス革命後の恐怖政治から誰もが抱く疑念と共通するものであろう。福澤諭吉はフランスの共和政治について次のように述べる。

千八百四十八年、仏蘭西の共和政治はその法律の過酷なること、当時立君独裁と称したる壤地利よりも尚お甚し。（『福澤諭吉著作集』第一卷、慶應義塾大学出版会、二〇〇二年、一五頁）

このことは、一八四八年革命よりも一七八九年のいわゆる大革命と一七九一年の憲法制定を指すと思われる。フランスでは、長く暴政に束縛された民衆は自由を得るために革命を起こすに至ったが、その後の共和政治による大乱で国勢四分五裂したため、「立君独裁の全権を待てこれを遵奉するの心」が生じた、と福澤は解説する。時勢をわきまえず妄りに社会を変革しようとするれば「遂には復た苛酷の虐政に窘めらるゝこと必せり。」（同右一三

福澤諭吉の思想の特徴は、こうした事態に陥る原因を民衆の無知に求める点である。

人に智識なければ必ず悪事を為すものなり。ペルシャ人の如き、無智蒙昧なるが故に止を得ずして虐政の下に立ち、君主一人の独断にて随意に政を施すと雖ども、人民これに安んじて嘗て怪む色なし。(同右)

それゆえにこそまさに「政治経済の科を学ぶ」ことが国民の緊要事となる、と福澤は力説する(同右一三五頁)。だが、問題は、知識や学問をどのように民衆の手に渡すかではなく、知識や学問が現在誰の手に握られているかにある。哲学館文庫の蔵書にはないが、福澤諭吉の『文明論之概略』(一八七五年)の第九章に注目したい。第八章「西洋文明の由来」でギゾー(François Guizot, 1787-1874)の『ヨーロッパ文明史』を参考にしてヨーロッパ文明を分類整理したのち、第九章で筆を日本文明に向ける。そこで次のように指摘をする。

人間の交際に於て、或は政府、或は人民、或は学者、或は官吏、其地位の如何を問はず、唯權力を有する者あらば、仮令ひ智力にても腕力にても、其力と名^{なづ}るものに就ては必ず制限なかる可らず。都て人類の有する權力は決して純精なるを得べからず。必ず其中に天然の悪弊を胚胎して、或は卑怯なるがために事を誤り、或は過激なるがために物を害すること、天下古今の実験に由て見る可し。之を偏重の禍と名く。有権者常に自から戒めざる可らず。我国の文明を西洋の文明に比較して、其趣の異なる所は特に此の權力の偏重に就て見る可し。(岩波文庫一八二頁)

政府、人民、学者等の地位を問わず、権力を握り偏重させれば人類の害を為す、と福澤は警告する。権力の偏重や濫用は政治に留まらず社会のあらゆる場面で見られる。「国家のイデオロギー装置」とはアルチュセールが唱えて有名であるが、ここでは触れない。井上円了が共和界の圧制を指摘するだけでなく、商法界、女子界、老人界、さらに理学界においても同様の権力の偏重による圧制を見たのも、福澤論吉と同様の危惧つまり現状認識を得たからにちがいない。

それにしても、繰り返しになるが、井上円了が理想世界として描く哲学界では知的権力の偏重は起きないのだろうか。円了曰く、「この界の人民は教育を受けず学問を修めざるも、自ら万理に通じ諸法に明らかに、知徳円満完備せるをもって、学校の設あることなし」（前掲五八頁）。哲学界においては、知識は知者に教え与えられるものではなく「自ずから」誰でも得られるものであり、習得された知識・知恵の量はまったく問題とならないとされる。だが、哲学界に入ればそういうことがありうるとしても、哲学界に入る前の人民の教育や学問はどうなっているのだろうか。問題は、如何にして哲学界に入りうるかにある。

話を戻して、つぎに円了自身が行った長期の海外旅行での見聞とこの想遊との関係を探ってみたい。

井上円了は長期海外旅行を三回行っているが、『星界想遊記』以前に行われた海外視察としては一八八八年六月九日から八九年六月二八日までの欧米旅行がある。この時の見聞は『欧米各国政教日記』上下編（一八八九年）にまとめられている（選集第二三巻）。その一部は先に『日本人』に投稿されているがここでは本書を参照する）。教育事情と宗教事情が報告の中心となっているが、ここでは法経思想のみ取り上げる。

井上円了が第一回目の欧米視察で最も強い印象を受けたのは、欧米各国およびその国民の独立自負の精神であった。

政教子の最も驚きかつ感じたるものは、各国人民みな独立の精神を有し独立の気風に富むこれなり。人民みな独立の精神・思想を有するをもって、各国みな独立の学問あり、独立の事業あり、独立の組織あり、独立の目的あり、独立の風習あり、独立の礼式あり、独立の宗教あり。その独立とはなんぞや。曰く、フランスは事々物々の上にフランス固有の風を存して英国の風に異なり、英国は内外上下の間に英国固有の風を存して米国の風に異なるをいう。(同右一四四頁)

こうした独立性を維持するに最も必要な三大機関として、円了は、言語・歴史・宗教を挙げる。いずれも、変化しやすい人心を変化させず持続させる力を有する。言語は、空間的に人心を結合し、歴史は、時間的に人の精神を永続させ、宗教は、これら両者の力を併せ持つ。それゆえに、各国固有の言語・歴史・宗教を保存することは、その国の独立を維持するに欠くべからざるものである(同右一四六頁)。ところが、わが国の現状は、日本古来の学問も事業も組織も目的もその独立を失い、西洋の事物に左右され、最も貴重な独立の精神そのものが失われつつある。この勢いで行けば「日本人は到底一定の主義なく一致の運動なく、民心離散し上下相和せず、その極み国家の独立を失うに至りてやむよりほかなし」(同右一四五頁)、と円了は日本の国情を憂う。

米国の宗教は「満囊自由の空気をもって吸入せるものなり、全身自由の精神をもって注射せるものなり」(同右四三頁)。これは、もともと米国人が信教の自由、教会の独立を唱えて母国から移民してきたことに由来し、彼らの宗教的自由の精神は政治的な自由へと自ずから発展する。

合衆国はその政体自由共和にして、その各連邦ほとんど独立の組織を有す。しかして、その国の宗教また自

由独立の組織を有し、各教会独立して各寺の法律を制定し、これを総裁統轄する本山なく、また教正なし。
(同右)

米国では、共和政を採用したからといって自由を失わず、圧制に至らなかった。それはなぜか。日米を比較して考えると、米国は「歴史なき新開の国」であるのに対して、日本は「歴史によりて建てたる旧国」である。米国は「平等同権、自由共和の齊民的主義の国」であるのに対して、日本は「上下貴賤の秩序階級ある国」である。米国は「外寇の患いなく外国の關係少なき国」であるが、日本はそうではない。つまり、米国はもとも自由の実現のために建てられた国であり、しかも外からの侵略に怯えずに済む地理上の利点があった。その点で自由と独立を維持しやすい環境にあるという（なお、黒人問題には触れられていない。）

こうした相異を見ると、日本は米国よりも欧州各国の事情に類同するところ大であることがわかる、と円了は言う（同右一四三頁）。したがって円了は、日本の政体として米国のような共和政ではなくドイツのような立憲君主政に範を求める。それと同時に、米国から大勢日本に来ているキリスト教宣教師の動向を危惧する。

もし、この宗教ひとたび人心中に入るときは、知らず識らずの間に共和自由の思想を養成し、その思想発して政治上の共和自由を唱うるに至るを計るべからず。これ、我が輩が今よりその結果のいかんを憂慮するところなり。（同右四五頁）

井上円了は、欧米政教日記と同時期に公刊した『日本政教論』でも、我が国に来ているキリスト教宣教師の多

くがアメリカ出身であることを憂いている。というのも、アメリカは共和政体を取り、「全く自由共和、平権同等の主義に基づきたるものにして、その宗教上の思想はわが国政体上の思想と並行両立することあたわざる」（選集第八卷六〇頁）からであると言う。

星界想遊記で見たように、井上円了は、共和界のみならず商法界、女子界、老人界、理学界のいずれにおいてもその内部に共和主義的匂いを嗅ぎつけ、これを「压制」として排除した。欧米での視察で欧米人の独立精神に衝撃を受け、現今日本の独立精神の欠如を憂うが、人民の独立精神に基づく一つの政体である共和政はあくまでも拒否される。

井上円了のこの長期海外視察は、哲学館開設（一八八七年九月一六日）後一年を待たずして行われたが、円了は帰国するとすぐに哲学館改良に取り組んだ。「欧米各国ノ事ハ日本ニ安坐シテ想像スルトハ大ニ差異ナルモノナリ」（「哲学館改良目的について」一八八九年一〇月、『東洋大学百年史 資料編Ⅰ・上』東洋大学、一九八八年）とし、欧米巡視中第一番に感じたことは、一国の独立を維持するには自国の言語、文章、歴史、宗教を保護することが大切だということである。しかるにわが国では、わが国固有の学問芸術があるにもかかわらずこれを講究する学者が少ない。

苟モ日本国アリ日本国固有ノ學術宗教アル以上ハ先ツ之ヲ講究シ傍ラ西洋ノ學術ヲ講究セサルヘカラス是レ唯、學術研究ノ順序ナルノミナラス一国独立上ニ於テ最モ必要ナル条件ナリ（「哲学館改良の目的」同年七月二八日、同右一〇一頁）

我邦ニハ我邦固有ノ學問アリ史學文學宗教學等はレナリ之ヲ愛護シ之ヲ專攻スルノ方法ヲ設ルハ日本從來ノ學問ヲ振起スルニ必要ナルノミナス日本ノ人心を維持シ獨立ヲ保存スルニ必要ナリ是ニ於テ日本主義ノ大學ヲ設立スル必要起ル」〔哲學館將來の目的〕一八八九年八月、同右一〇二頁）

井上円了は欧米でその獨立精神の強靱さを実感し、現今日本にそれが欠けていると反省して、帰国後直ちに教育改革に取り組んだ。獨立精神を維持するものは自國の言語・歴史・宗教であり、わが國でも日本古來の独自の學術宗教を復興し、これを攻究しなければならない。こう考えた円了は、自ら創設した哲學館を「日本主義の大學」へと改良する計画を練る。

最後に、海外視察中に井上円了が思いついた一つの經濟政策を見ておきたい。

ニューヨークからロンドンへの汽船に乗った際、上等船客四〇〇余名のうち九割がフランスへ遊びに行くアメリカ人だと知り、井上円了は外國人の來遊による安直な富國政策を思いつく。すなわち、第一に、海外貿易では高額の關稅がかかるので、外國人に日本へ來てもらって安価に物品を購入してもらうこと、第二に、外國人の口に合わないといわれる米食、米酒、醬油のごときは、彼らが味に慣れていないだけなので、日本滞在中に繰り返しこれを味わえば慣れて輸出品の増加となること、第三に、日本從來の遊興技芸（例えば書畫、碁、將棋、茶の湯、插花等）を現地体験してもらい、西洋に伝えてもらうこと、第四に、道路の改良、建築、美術、演戲等の改良が進むこと、第五に、日本人が西洋人の風を見て開明の事情を知り風俗改良が自然に行われるようになること、第六に、野蛮の國と思われている日本の実狀を知ってもらえれば、彼らは日本蟲負になること、である（同右五一〜五二頁）。どこまで本気で考えたかはわからないが、この政策は、現在日本の重要な經濟政策の一つにもなっ

いるいわゆる観光立国論にはかならない。

四 小活

井上円了にも法学・経済学に関する言説があることがわかったが、現状分析に基づく実証科学的考察というよりも多分にイデオロギー的で、論理的にも十分練り上げられているとはいえない。円了は、国の本になるものとは何かと自問し、それは兵力でも商業でも金銭でも学問でもないと言う。と言うのも、兵力だとしたらその兵力の本は何にあるかとの問いが生まれ、同様にして商業の本は、金銭、学問の本はと問いは尽きないからである。円了によれば、その答えは精神にある。

国の本は人にあり、人の本は精神にあり、精神ひとたび定まりて、初めて国家の富強を講ずることを得るなり。兵力も商業も学問もみなこの精神によりて、初めてその活用実功を見ることが得るなり。しかして、その精神を一定するの法は教育によらざるべからず。（前掲『欧米各国政教日記』二三頁）

ここで言う教育は、学校教育に留まらず、知力の教育全般を指し、「社会百般の事々物々、政治、宗教、人情、風俗より天文、地理、氣候、地味にいたるまで、いやしくもわが体外に圍繞せる万象万化、みなことごとくわれを教育して一時も休まざるものなり」（同右）と言う。そのためにも、誰もみな学校の外に出て「活学活書」を志し、世界各地を渉獵して世界の動向について見聞を広めなければならぬ。維新以来、欧米各国の文物とともに宗教も次々と我が国に入り、機械文明だけでなく精神界にまで深くその影響を及ぼしている。「わが政府、維新以

来百般の制度を改良するに当たり、年々有為の士を欧米に差し遣わして、あるいは学術上、あるいは實際上、かの地にある事々物々を観察せしめたり」(前掲『日本政教論』五一頁)。欧米の法経思想やその諸制度は我が国でもだいぶ明らかとなり法律が整えられ経済の合理化も進んだ。学術も徐々に発展しつつある。だが、日本の本を左右しかねない欧米の宗教に関してわれわれはあまりに無知であり無防備に過ぎた。こう憂慮する円了は、海外視察に際し「国家のためにひとり政教の将来を憂慮し、自ら進みて欧米各国の巡遊を企画するに至りしゆえなり」(同右)とその抱負を述べる。

ある人が円了に、あなたは哲学者であるのになぜ政教を論じるのかと問うのに答えて円了曰く、「政教すなわち哲学なり」(前掲『欧米各国政教日記』二二頁)。哲学には理論哲学と実際哲学があり、政教は後者に属する。理論哲学は真理発見を目的とするが、実際哲学は実益を興起することを目的とする。宗教学と教育学がこれにあたる。自分にとって大切なことは、法経の本となる精神の涵養を企図する宗教と教育に専念すること、である。これが、井上円了の答えであり、生涯をかけてなされた実践であろう。